

《翻  
訳》

ダリット連帯プログラム報告（三）

一九九四～一九九五

桐  
村  
彰  
郎（訳）

目次

- 序文…バグワン・ダス DSP代表
- 前置きの報告…ジェイムス・マッセイ DSP名誉幹事・理事
- プログラム優先ナンバー・ワン…
- さまざまなダリット連帯プログラムの強化とネットワーキ化
- 北西インド（以上第一巻一号）
- 西部インド
- 中央および北東インド
- 南部インド（詳細は女性および青年諸報告参照）
- プログラム優先ナンバー・ツー…
- ダリット共通イデオロギーに関する協議会
- プログラム優先ナンバー・スリー…
- ダリット・先住民全国協議会報告（以上第一巻一号）
- プログラム優先ナンバー・フォー…

ダリット問題の国際化

女性プログラム

ダリット女性会議・ラクノウ

指導者訓練キャンプ・チャンガナチェリー

準地域の女性ワークショップ・パンジヤブ州シャブール村

女性会議・ブネー

マヒラ・ジャグラン・カラジア

エンパワメント・プログラム

北京女性会議

DSSP青年プログラム・年次報告

青年指導者訓練・ヒネリ

バラライ村訓練プログラム

全国青年プログラム計画ワークショップ・ナグプール

マンナ・シン・ワラ村セミナー兼村落レベル訓練プログラム

村落レベル自覚化キャンプ・マク

ダリット青年指導者訓練キャンプ・チャンガナチェリー（以上本号）

ダリット連帯指導者およびエンパワメント・プログラム・ナグプール

青年指導者訓練プログラム・ウスコタイ

新たなパラダイムの全国青年幹事会議

世界教会協議会総書記とその一行訪問時における演説の交換

プログラム優先ナンバー・フォー

グリット問題の国際化

D S P 一行のヨーロッパ訪問…報告

本報告は、グリット連帯プログラム(D S P)代表の英国およびヨーロッパ訪問を簡潔にカバーするものである。訪問の目的は、ヨーロッパの仲間や他の関心ある人々に、インドのグリット問題を知らせることであつた。この訪問それ自体は、グリット問題を国際化しようとするD S Pの全体的事業の一部であつた。

グリット連帯プログラム(D S P)は、一九九二年二月に生まれたが、これは、一九九二年二月におこなわれた全国会議によつて取り決められた四点の協議事項(目標)を遂行するために、インド各地で多数の協議会兼自覚化プログラムを組織してきた。これらの目標は次の通りである。一、インドのグリットを宗教や地域や言語やカーストあるいはサブカーストという相違を横断して統一すること。二、グリットの惨めな状態を全体に広げかつ永続化するような現行の教育システムを変更すること。三、インドの先住民(指定部族)と親密に活動すること。そして、四、グリット関連の問題を国際化すること。それで少数のD S Pのメンバーをヨーロッパに派遣するという決定は、D S Pの第四目標を遂行しようという試みなのである。

一、D S P 一行

ヨーロッパに旅することになる一行は六名のメンバーから成つた。女性の参加とさまざまな宗教グループの代表を重視する必要性を記憶にとどめて、D S Pの四名の役員——Mr. バグワン・ダス(フデイスト…D S P代表)、Dr. シェームズ・マッセイ師(クリスチャン…幹事・理事、D S P)、Dr. (Mrs.) スワルナ・ラタ・デビ(クリスチャン…グリット女性役員)、そしてMr. A. ラメシア(ヒンドゥ…グリット青年役員)——が三つの宗教を代表した。一行の二人のメンバー、すなわちサルダル・シン・ノナ(シク活動家)とMrs. ウジワラ・クレシ(ムスレム)は一行に加わることができなかった。Mrs. クレシは家族問題を抱えていたし、Mr. ノナは最後の瞬間のビザ問題のために行くことができなかった。

## 二、訪問

グループは五月二五日から二七日にかけて英国に、五月二八日から三〇日にオランダ、五月三〇日から六月六日はドイツ、そして六月七日から九日はスイスに滞在した。DSPの代表者は、上述の国々で、教会やNGO代表の出席するさまざまな組織の本部の会合を持った。ホスト組織は、ロンドンの「クリスチャン・エイド」、スコットランドのエディンバラの「クリスチャン・エイド」、オランダのザイストの「ICCCO」およびアムステルダム「CEBEMO」、ドイツのフランクフルトの「ダリット連帯フオーラム」、ハンブルクの「EMW」、アレクラムの「NMZ」、シュトゥットガルトの「EMS」(プロテスタント宣教師協会)、そして、そしてスイスのジュネーブの「WCC」(世界教会協議会)を含んでいた。会合はこれらの組織でおこなわれたが、そこには多くの他の関連の組織、教会、人権活動家、ジャーナリストの代表たちが出席した。

ヨーロッパへ行く前に一行のメンバーは討論し、訪問から最大限の利益を引き出すために義務と役割が割当てられた。

以下はDSP一行が出席した会合とプログラムの要約である。一九九五年五月二五日にロンドンのクリスチャン・エイドでおこなわれた最初の会合で、DSPの四人の一行全員はMr.レオ、Mr.ケビン・バンデルおよびその同僚たちに会い、彼らに到着の挨拶をした。一行の二人のメンバー、Mr.バグワン・ダスとDr.(Mrs.)スワルナ・ラタ・デビは、スコットランド、エディンバラのクリスチャン・エイドへ行った。彼らはまたスコットランドへおもむく前にクリスチャン・エイド事務所で幾人かの役員や活動家に会った。マッセイ師とMr.ラメシアは翌日にクリスチャン・エイドの役員や他の代表たちとの会合に出席することになっていた。

ロンドンのクリスチャン・エイドでおこなわれた会合のうち、午前中の会議で、チームのメンバーは、クリスチャン・エイド理事のテイラー師や他の重要な幹部と議論したが、そこでテイラー師はDSPの代表たちにクリスチャン・エイドの支持と連帯を確約した。午後には彼らは、ロンドンに基地を置く人権活動家たちと会ったが、その中にはアンベドカル主義者・プデイスト諸組織連合のMr.ゴータム・チャクラバーティや他の著名な指導者たち、それにMr.ケビン・バンデルや他のクリスチャン・エイドのスタッフメンバーがいた。この会議で、さまざまな教会やNGOの代表たちはいろいろな方法でのDSP支持の可能性を議論した。

同日、一行のメンバーはロンドンのWACC(世界キリスト教コミュニケーション同盟)を訪れて、WACC調査および刊行部

門理事の Dr. プラディップ・トーマスと WACC アジア・コーディネーターの Mr. テイビッド・リンに会った。Dr. シェームズ・マッセイはダリット問題に光をあてるため、WACC のニュース・ブレトン「アクション」編集者のインタビューを受ける一方、Mr. ラメシアは Dr. プラディップ・トーマスと見解を共にした。のちに WACC アジア・コーディネーターの Mr. テイビッド・リンも討論に参加した。

Mr. バグワン・ダスと Dr. スワルナ・ラタ・デビはジョン・ワイリー師がスコットランドのクリスチャン・エイド事務所で開催した会合に出席した。出席者で著名なのは UNPRO のアジア書記ジョン師、スコットランド教会の世界伝道委員会の D. クリス・ウィグルスワース、それにリンリスゴウの Mr. W. M. ロスであった。彼らのうちの二名は「古代インドの専門家」でありダリットと部族民の問題について多くを知っていた。マハラシュトラで働いていた幾人かの宣教師が会合に出席した。会合で一行は「ルーツ」—不公正の歴史あるいは起源—と題するビデオフィルムを上映し、それに続いて討論があり、ここではダリットが世界で最大の迫害されたマイノリティーであることが説明された。彼らはヒンドゥ主義によって創り出され刺激された巨大な社会的経済的不平等に苦しんでいる。不可触賤民であるという烙印はその一部である。キリスト教や他の宗教への改宗は、ダリットがその人間性を再獲得するのを助けたが、不可触賤民であるという烙印を除去することはできなかった。討論のなかで、DSP はすべてのダリットが団結し宗教宗旨関係にかかわらずひとつの旗の下に結集するために、また団結して変革を求めて闘うために始められたものであることが説明された。支配階級もまた虜になっており、解放され教育されてダリットの熱望と恐れを評価し理解するようにならなければならない。ダリットのクリスチャンとその基本的諸権利に関する問題もまた議論された。

オランダでは、Dr. スワルナ・ラタ・デビ、Mr. A. ラメシア、Dr. シェームズ・マッセイからなる三名のメンバー一行が、五月二七日空港で Ms. コニー・ホームシエルクの出迎えを受けた。彼女は人権問題に非常に積極的にかかわっている人である。一行がホテルに落ち着いた後、Ms. ホームシエルクは次の二日間のプログラムについて知らせてくれ、そして一行は共通の関心事について意見をともにすべく非公式の討論をする機会を持った。二八日に一行は Mr. バリー・ロエルフに連れられてデン・ハーグを訪問した。日曜日だったのでむしろ文化的訪問であったが、同時に我々は ICCO 南アジアチームの海外関係コーディネーターである Mr. バリー・ロエルフと意見を交換するというよい機会を持った。実際オランダへの訪問全体を調整してくれたのは Mr. バリー・ロエルフ

フであった。五月二九日に三つの会合が計画された。最初のものはICCOのローマ・カトリックの側—CEBEMOで組織された。CEBEMOの事務所で行はインド編集部(デスク)担当の役員および教会の代表たちと会合し議論した。「連帯を求めて」というタイトルでドリット連帯プログラムが最近制作したビデオフィルムが上映された。CEBEMOの代表たちは、一行にICCOとともに一緒になってDSPの活動に将来参加することを確約した。午後には三つの討論会がICCOの本部でおこなわれた。第一のものは、ICCOのゼネラル・プログラム・ディレクターおよびワールドワイド・プロジェクト・コーディネーターのMr. ロエル・アーラベルスベルグとのものであった。ICCOのゼネラル・プログラム・ディレクターは、会合の一つで、DSPの活動に関し世界教会協議会を通じての完全な保証を与えた。この会合に続くもう一つの会合は、バリー・ロエルの率いる南アジアチームのメンバーとのものであった。ここで再び「連帯を求めて」と題するビデオが上映され、ビデオにもとづく議論がおこなわれた。南アジアチームのメンバーは、DSPの将来のコースについて知ることに大変熱心で、ICCOとDSPとの間の将来の協力に関してとても建設的なサジェスチョンがされた。午後遅くに第三の会合が、教会および伝道協会の代表たち、オランダ伝道協議会総書記Dr. ジャン・バン・バツクラーレル師およびオランダ改革派教会代表たちとおこなわれた。ロイスデンおよびBBOはMr. アド・ヌークと彼の同僚たちが代表した。簡単な紹介の後ビデオフィルムが上映されその後議論が続いたが、そこで教会代表や伝道協会が討論した基本問題は、どのようにして彼らのDSPへの完全な支持を拡大して、その伝道的課題を遂行し、DSPの活動を助けることができるかであった。五月三〇日に一行はドイツ、フランクフルトに向かって出発した。

五月三〇日、ドリット連帯フォーラム(DSF)、これはフランクフルトでのホストでもある新しく形成されたNGOだが、これを代表するMr. フィリップ・ミュラーによって一行は招かれた。三一日夕方、グループはフランクフルト大学でのゼミナールに参加するよう招待された。Mr. ダスは請われて「インドにおけるカーストとアンタッチャブルの地位」について語った。話の中でMr. ダスは、解放を求めるドリットの歴史と闘争、Dr. B.R. アンベドカルの役割、憲法上の諸規定、アフアーマティブ・アクションと今日の状況を論じた。一九九五年六月一日、DSPとDSFメンバーとの会合がおこなわれた。会合に出席したメンバーは、Mr. フィリップ・ミュラーのほかDr. レイナ・クルーゼ(BFW)、Dr. クラウス(EMW)、ハンス教授、Mr. ケオルグ・シユナイダー、Mr. ゲバハルト・シュバゲール(DSSF)、Ms. エリカ・マルケ(EZE) およびレーリク教授であった。このフォ

ラムでは、ドイツ人がどのようにしてDSFを含む仲間に基礎をおいて、さまざまなNGOや組織とのインドにおける相互関係に影響を与えることなしに、DSFの活動を支援することができるかに関して議論がなされた。しかし彼らはすべて、ダリット問題に関して、主要な仲間の一つとしてDSFの活動を支援することに同意した。

六月一日DSF一行はDr.クラウス・シャエファ師にともなわれてハンブルグに到着した。六月二日に会合がEMWで開かれた。会合に参加した人々のなかで著名なのはDr.フランク・クルシュナー・ベルクマン、Dr.クラウス・シャエファおよびプレント師であった。六月三日会合がハンブルグのプレクラムで準備され、ハンブルグのNMZ理事(辞職)、NMZ理事(未就任)のDr.ハンス・ジョカイン、シュトゥットガルトから来たラインハルト、NMZのプレント師が出席した。DSF一行は午前一二時頃にハンブルグからプレクラムに着き、NMZで昼食をとり、会合に出席した。二時間ばかり続いた会合の後、一行は北海を訪れる機会を持った。一行はプレクラムに戻り夕食をとった。会合はもう一度DSFのビデオフィルム「ダリットと先住民」出合いの場」で始まった。七〇年代はじめにインドで勤務したことのある多くの男女がビデオフィルムを見、ダリットと先住民の問題についての討論もおこなわれた。

Mr.バグワン・ダスは直接ジュネーブへ赴き、他のメンバーは六月五日にシュトゥットガルトに着いた。EMSのDr.C.L.フルタドが、一行をシュトゥットガルトの鉄道駅で出迎えてくれた。宿泊先にはEMSのゲスト・ハウスが用意されていた。六月六日朝の会議がよく計画されたプログラムで始まった。全部で二三名の参加者があった。これらの参加者には教会関係組織の首脳、少数の学生や活動家が含まれていた。午後の会議はヒンドウ教、仏教、キリスト教、イスラム教、シク教においてダリットであることは何を意味するか、という問題を論じることに向けられ、そしてこれらの宗教においてダリット女性であるということについての問題もまた論じられた。この会議では、問題はまたDSFの起こりやインド各地でおこなわれるそのさまざまなプログラムにもおよんだ。午後の会議では、全体グループが三つのサブ・グループに分かれ、各サブ・グループは参加者の尋ねるさまざまな質問に答えるDSFの一人のチームメンバーを置いた。

一行は一九九五年六月六日の夕方にユレーレルでジュネーブに到着した。一行は駅でボブ・スコット師に迎えられ、WCCでの次の二日間の滞在中準備されているプログラムについて説明を受けた。六月七日の朝、Mr.バグワン・ダスはMr.タリク・ミトゥ

リ——宗教間関係事務所の——と会合を持ち、Dr. (Mrs.) スワルナ・ラタ・デビはLWF (ルーテル世界連盟) のMrs. レギナ・サムエル——アジア・デスク、伝道と開発の——と会い、他方Mr. ラメイアはボブ・スコット師によつてWCCを案内された。マッセイ師は別の重要な会議をやっていた。午後一二時三〇分頃、グループは総書記代理 (プログラム調整事務所) の主催する昼食会に行つた。昼食会に出席したメンバーは、ブルゲッテ・コンスタント (ドイツ)、管理助手のMs. ランディ、理事でコミュニケーション部門のDr. ジャン・コック (オランダ)、教会およびエキュメニカル関係事務所のMr. ヒュイベルト・バン・ピーク (オランダ)、ユニットI信仰と職制のアラン・ファルコナー (アイルランド)、「ワン・ワールド」編集長ギュンター・ラート (ドイツ)、ジャンヌ・ベッチャー (アメリカ)、総書記の助手でユニットII女性デスクのニコル・フィッシャー (スイス)、および出版・情報役員ジョン・ニューベリ (イギリス) であった。

午後マッセイ師は、ユニットI信仰と職制のDr. アラン・ファルコナー (アイルランド) との会合を持った。Dr. スワルナ・ラタ・デビとMr. ラメイアもまた会合に出席した。午後三時頃グループは理事でユニットIIIのサム・コビア師 (ケニア) に招待された。午後七時グループは、ボブ・スコット師の家でユニットIIIのPCR (人種主義と闘うプログラム) と特別調査団が共同で準備したディナーに行つた。六月八日午前九時、Dr. スワルナ・ラタ・デビはユニットIII——女性デスク・サービス、ドイツユベレ (ドイツ国際放送) およびアメリカABC——のMs. アルーナ・グナナダサンと会合を持った。Dr. ジェームズ・マッセイは、理事でコミュニケーションズ・ユニットのDr. ジャン・コックと会つた。午前一〇時半にグループはメディアの代表たちと会合を持った。すなわち、アメリカン・ブロードキャスティング・コーポレーションとドイツユベレ、ドイツ・プロテスタント・プレス・エーゲンシー、エキュメニカル・ニュース・インターナショナル、ベルリンのデイ・キルヘ、ジュネーブのル・クーリエ、オランダのメディアで働いているフリーランスのジャーナリスト、ワン・ワールド (WCCの雑誌)、である。午後一二時半グループはサム・コビア師の主催する昼食会に行つた。昼食会に出席したメンバーは、総書記代行・管理及び財政総書記代理のミハエル・デービス (イギリス)、世界改革派教会同盟総書記のDr. ミラン・オボセンスキー (チェコ共和国)、LWF総書記を代表してルーテル世界連盟アジア・デスクのトーマス・バトング (インドネシア)、世界学生キリスト教連盟の共同総書記クラリッサ・バラシ・シシップ (フリビン)、ユニットIIIのアルーナ・グナナダサン、ユニットIVの理事を代表してユニットIVアジア・デスクのキョン・セオ・パク、



ユニットIVコミュニケーションズの前レンダ・フィツパトリック(オーストラリア)、ユニットIの理事を代表してユニットI神学教育のポエルワイダグド(インドネシア)、先住民問題コンサルタントのオイゲニオ・ポーマ(ボリビア)、コミュニケーションズ部門のミリアム・レイディ・プロスト(オーストラリア)、ユニットIII青年問題コンサルタントのドンナリー・エドワーズ(アンティグアおよびバルブダ)、ユニットIII PCR のデボラ・ロビンソン(アメリカ)、ユニットII PCR のマリリア・シューラー(ブラジル)、ユニットIII PCR のホブ・スコット(オーテアロア・ニュージーランド)、ユニットIのタリック・ミトゥリ(レバノン)、およびグラフィック・デザイナード印刷所のエドウィン・ヘイシンク(オランダ)であった。Mr. バクワン・タスは短い演説で、世界のふみにじられ、抑圧され、惨めな生活をおくる人々の大義を擁護するWCCの積極的役割に対し、一行を代表して感謝を表明した。午後三時頃グループはホブ・スコットとDSPの将来のプログラムについて議論をした。四時 Mr. A. ラメイアはユニットIII(青年デスク)の Mr. ピーター・ブロックと会合を持った。

### 三、成果

— DSP 一行の訪問の成果は、以下を含む。

- (1) DSP の活動に関し、英国、オランダ、ドイツ、スイスにおいて訪問した仲間(パートナー)からの支援の確約を得た。
- (2) 一行は、その課題—ヨーロッパの仲間の間に、インドのダリットの事態への自覚、関心を共有し、作り出すこと—に成功した。
- (3) 教会、組織、NGOを含むヨーロッパの仲間は、主要な仲間の一員としてDSPを通じてダリットと連帯することを確約した。
- (4) ヨーロッパの仲間はまた、教会や政府がインドにおける仲間に影響を及ぼすように、また、インドの教会と政府がその闘いにおいてダリットとの連帯を示すように、教会にも政府にも圧力をかけつつづけることを確約した。
- (5) ヨーロッパの仲間はまた、そのコミットメントを拡大して、優先的にダリットと関連するプログラムを支援することとした。
- (6) ヨーロッパの仲間はまた、ノンダリットのリーダーを通じて活動するのではなく、ダリットおよびダリットのリーダーたち

とともに直接に活動することを確約した。

(7) ヨーロッパの仲間のほとんどすべては、世界教会協議会(WCC)——それは中立的な世界機関であり、インドキリスト教のメンバーも含んでいる——を通じて活動し、かつ、DSPの活動を支援し続けることを確約した。

Mr. バグワン・ダス

Dr. (Mrs.) スワルナ・ラタ・デー

Mr. A. ラメイア

Dr. ジェームズ・マッセイ師

により提出

一九九五年七月一日付

## 女性プログラム

女性はほとんど社会の半分を代表するし、また一般的には、世間から引きこもっている半分でもある。グリットの女性は、いわゆる上層カーストの女性よりも大きい自由を持っているけれども、彼女らがグリット社会のより抑圧された部分であるのは悲劇である。彼女らは、女性であるがゆえにだけでなく、またグリットであるがゆえにも抑圧に苦しむのである。DSPは、そのすべてのプログラムで、参加者の少なくとも三〇%は女性でなければならぬと主張している。このことは別として、DSPはまた、グリットの女性がその特殊な問題をもっと自由に、そしてならぬの抑制もなく討論できるように、もっぱら彼女達だけのプログラムを組織する努力もしている。

いくつかのプログラムが全国的、地域的また準地域のレベルで計画されたが、これらの多くは、女性リーダーたちが北京会議の準備にかかわったので、組織されえなかつた。しかしパンジャブやケララやMPやマハラシュトラでは、準地域のレベルでいくつ

かのプログラムを準備することが可能であった。

組織されたプログラムのなかには次のものがある。

- (1) 一九九五年六月二四日—二五日  
グリット女性会議——グリット女性に特有の問題についての討論、UP州ラクノウ
- (2) 一九九五年六月二九日—七月二日  
女性指導者訓練キャンプ、ケララ州チャンガナチエリ—
- (3) 一九九五年七月二三日  
準地域女性ワークショップ、パンジヤブ州グルクスプール県シャプール村
- (4) 一九九五年七月二八日—二九日  
地域女性会議、マハラシュトラ州ブネ—
- (5) 一九九五年八月一〇日  
マヒラ・ジャグラン・ワークショップ、MP州カラジア
- (6) 一九九五年九月三日—二五日  
グリット女性エンパワメント・プログラム、AP州ピチャトウア

グリット女性会議・ラクノウ

「グリット女性に特有の諸問題」の議論は、一九九五年六月二四日—二五日にラクノウのアンベドカル・マハサンク・オフィツスホールでおこなわれた。このプログラムの参加者はUP州の女性であった。

プログラムはグリット女性の特殊問題を論じ、現行の憲法的並びに法的保護規定に関して、これらの諸問題を女性が評価することができるよう求めた。一般的に女性、特殊にはグリット女性からの苦情をうける際の執行機関の冷淡な態度に女性が全員一致で同意したことが注目された。グリットの女性は、警察署に行つたとき、さらなる食い物にされる、性的食い物にさへされることが

しばしばであった。

参加者達はまた、UP州におけるグリット、特にグリット女性の現在の地位をも議論した。暴力行為が増加し、そして政府がこれら暴力行為をやめさせあるいは抑止するのに無力であるようにみえることには、苦痛と深い関心をもって留意された。暴力行為のエスカレートに責任のある主要な要因の一つは「サフラン革命」であり、「ヒンドゥートゥバ」の強調である。数世紀にわたるグリットの非人間化が、結果として自己評価のほとんど全面的な喪失を生じたこと、これに立ち向かうためには、公的なまた生涯にわたった教育が強められねばならないことが強調された。

#### 指導者訓練キャンプ・チャンガナチェリー

一九九五年六月二十九日—七月二日にケララ州のチャンガナチェリーでおこなわれた「グリット女性の指導者キャンプ」には三名の参加者があった。

CSI（南インド教会）青年運動の幹事長M.S.サム・アブラハムが指導者訓練キャンプの開会式をおこなった。DSPの州召集者のK.L.ジョン師がグリット連帯プログラムと全国や地域や州レベルでのその活動家達を紹介した。

人民の歌も教えられた。これらの歌は抑圧されたグリット集団の受難と解放に密接に関連しているのである。

著名なグリット活動家で作家のM.K.ポール・シラクロツが「時代を通じてみた女の束縛の歴史的展望」について語った。彼はまた述べた。女性は古代史においては支配的で強力であった。しかし後に男性が支配し強力となった。世界の諸宗教もまた女性を抑圧した。社会は、女性の子供の誕生を呪いとして見、男性の子供の誕生を賜物と見始めた。

グリット女性は、上層カーストによっても、女性によっても抑圧された。グリット女性は動物のように扱われた。彼女らは、乳房を隠すこと、装身具を身につけること、教育されること等々を許されなかった。この慣行は一九世紀まで続いた。

ケララの女性たちは、スリ・アヤンカリの有能な指導の下で解放を求めて闘い、そしてこの種の束縛から自由を得た。しかし彼女らはなお、たとえば雇用の機会や教育などの否定という束縛の下にある。会議は午後五時まで続き討論は午後五時—六時におこなわれた。

グリット女性協会幹事のMs.ラブリー・ステファンは「階級に支配されたコミュニティにおけるグリット女性の抑圧」について話した。グリット女性とはなにもなのか？社会においてカーストに支配されたグリット女性の独自の特徴とはなんなのか？グリット女性の直面する問題など。

グリット女性の問題は抑圧されたコミュニティに関連している。グリット女性は富や力をとまなう影響力を持っていない。彼らはいかなる土地も所有していない。失業、産業への無関係、教育や近代テクノロジーにおける後進性など。彼女らはまた政治的にも抑圧されている。Ms.ラブリー・ステファンは、差別に対して統一して抵抗しよう参加者に強く呼びかけた。

グラミーナ・ヴァニタ・プレスタナム会長のMs.アレヤンマ・ジョンは「グリット女性と信仰」というテーマで話した。

女性特にグリット女性は、一般的に原理主義的宗教によって差別されている。イスラムでは信仰に参加する自由はなく、女性はケララでは寺院のいくつかには入ることができない。たとえばサバリマラである。寺院・モスク・チャーチで礼拝に参加する権利はない。しかし、CSI(南インド教会)やCNI(北インド教会)やアングリカン・チャーチなどのないいくつかの例外的ケースでは、女性を組織し始めている。

グリット女性は迷信的信仰や伝統の真只中にいる。彼女らは、悲惨や受難は神の意思、カルマ、運命などであると教えられている。これらの信仰のゆえに、グリット女性は、神の意思に反することは罪であると考えて、その抵抗力を失ってきたのだ。

彼女は、グリット女性はその基本的信仰について、また、解放の必要性について自覚すべきであり、そのために、ともに団結しその大義のために戦わねばならない、と強調した。彼女も同じように参加者に強く呼びかけた。

Ms. D. P. カンジラムは、グリットの発展のなかで彼自身のいくつかの経験を共にした。彼は説明した。イーザバ、ネヤズなどのようなコミュニティが巨大な発展を成し遂げたのは、かれらがスリー・ナラヤナ・グルーやマナトウ・パドマナバパンのような指導者たちを見分け、そして各コミュニティが、これらのリーダーの下に組織され、それゆえに、彼らが教育的、政治的、経済的に発展したからである。しかし、ロ・アンベドカルやスリ・アヤンカリののちには、グリット・コミュニティが受け入れるこのような指導者はなく、そのため彼らは他のコミュニティのように発展できなかった、と。彼はまた正義および権利のために統一して闘う必要性を強調した。

社会経済開発局の副理事、M. K. シャロフは、「ケララにおけるグリットと貧困女性の運動」というテーマを論じた。彼は言った。グリット女性は虐げられみんなから無視されている。彼女らは土地のない労働者であり低カーストである、と。失業、読み書き能力がないこと、不健康な状態、近代テクノロジーに不慣れなことは、グリット女性の直面する問題である。グリット女性は、これらの問題に直面せざるを得ず、そのために自らを組織しなければならぬ。彼女らは男性支配に抗しなければならず、同時にカーストの抑圧と資本主義システムに対して闘わねばならない。なぜなら資本主義社会はカーストシステムを創出し、それによって貧困や他の悪を作り出すからである。彼は南アフリカやアメリカにおける黒人女性の闘争、他の諸国の女性が指導する諸闘争の例を語った。グリット女性は自分たちだけでは強力な資本主義社会に対して闘う力となることはできず、それゆえ後進諸階級、マインリテイ、アーディワイシーや漁師のような他の貧しいコミュニティと結びつかねばならない。

参加者を四グループに分けて、グループ討論が午前九時—一時におこなわれ、次のテーマに関して問題が討論された。

(1) 男性の転換のための動機。

(2) カーストに支配された社会におけるグリット女性の諸問題とは何か、またいかにして我々はこれらの問題を解決できるか。

(3) グリット女性は、どのようにして全体としてグリット・コミュニティの直面する問題に参加し、それらを解決できるか。

(4) 被抑圧コミュニティの解放にとって妨害物である原理的信仰や伝統とは何であるのか、そしてそれはどのようにグリット女性に影響をおよぼすのか。解決とは何か。

(5) 成長するグリット運動に対抗する諸構造とは何か、発展するグリット政治の政治的仲間とは誰なのか。

総会後、参加者たちはプログラム全体を評価した。彼女らは、プログラムはグリットの歴史とその隷属状態について学ぶことを助けたと感じ、いかに原理主義的な信仰がグリット女性に影響をおよぼしているかを考え、また解放が必要なることを感じた。

最後に、郡や県のレベルにまで、この研究プログラムを拡大することが計画された。

準地域の女性ワークショップ・パンジャブ州シャプール村

準地域での一日女性ワークショップが九五年七月二三日、パンジャブ州グルダスプール県のシャプール村で組織された。

ワークショップの目標は、パンジャブの、特にグルダスプール、アムリツァ、フェロゼプールの諸県や近接諸地域の女性代表たちが、いくつかのエリアの女性活動家やグループの間に闘おうとする決意を鼓舞しまた連帯を築きあげるために一緒になり、そして、共通の問題を討論するのを可能にすることであった。女性たちの半分以上は村落女性で、たとえいかなる組織にも関係していないにしても、これらの局面において重要な貢献をしてきたし、また依然として貢献している人びとであった。

パンジャブが大きな交戦時期から抜け出た後、一般的には人々に対して、特殊にはグリットに対してとる執行機関の態度は、むしろ高圧的である。苦情は記録されず、刑事告訴についてもしばしばいかなる措置もとられず、一般的にグリットは、社会問題の根本原因であるかのように取り扱われる。ひとりの参加者は、総体的無力感が存在すると指摘した。グリットはまた、一般的に激しい労働であるが乏しい見返りしかない職業についているので、いわゆる上層カーストの財力をもっていない。

全体的なコンセンサスは、集団が波のように前進できるようにするために、第一の優先権が子供の教育に与えられねばならない、ということだった。教育の習得は、職業の改善の可能性をもたらす。女性たちはまたさまざまなセクシヨンのグリット間の統一が、上層カーストの改革され得る前に、絶対的に必要だと断言した。

#### 女性会議・ブネー

ブネーは、一九九五年七月二八日—二九日におこなわれたグリット女性の地域ワークショップのホストであった。会議は女性に關する諸問題を取り上げ、討論は「女性と法」、「女性と教育」、「女性と健康」、「カースト主義者のグリット女性に対する態度」についておこなわれた。いくつかのケーススタディが研究のために取り上げられた。

参加者はまた、自由化が一般にはグリットに、特殊にはグリット女性に与えた効果を議論した。幾人かの話し手は、D.C.アンベドカルの著作のさまざまな面とグリット女性の闘いに対するかれの貢献に言及した。参加者たちには、女性リーダーと女性グループがそのアプローチと働きにおいて非常に個人主義的であると感ずるものもあったので、ネットワークおよび共にする活動の必要性もまた強調された。女性がまず統一することなしには、グリット間にいかなる真の統一もありえないと感ずられた。参加者たちは統一の目標に向かって活動することを決意した。

マヒラ・ジャグラン・カラジ

辺鄙な町、カラジは、DSPを代表するMrs. アニー・ボロの組織したマヒラ・ジャグラン・ワークショップのホスト役であった。九五年八月一日の一日ワークショップには四〇名の参加者——三〇名の女性と一〇名の男性——をみた。それは、主に部族とダリットの住むエリアにあるこの辺鄙な町で組織された最初のたいへんなプログラムだった。参加者の多くはまったく読み書きのできない少女や女性だった。参加者たちは独特の率直さで、その受難、その搾取について語り、そしてどのように苦しんでいるか、差別されているかについて語った。彼女らは、男性よりも低い賃金、健康施設の欠如、教育の欠如、そして所有権の否定について語った。参加者たちは、DSPが彼女らの憲法上のまた法律上の権利について人々を自覚化するようなより多くのプログラムを取り上げるべきであり、そして、搾取と抑圧を克服するために闘争するときに彼女らを助けるべきだと力説した。

エンパワメント・プログラム

ネルー・ユバジャナ・セバ・サンガム書記のMrs. P. バサンタが開会の祈りを捧げた。Mrs. P. バサンタは、ネルー・ユバジャナ・セバ・サンガムの状況と起こりを分析し、彼女がダリット女性として人生上経験した不満について簡潔に話した。目覚めの歌が歌われた。歌は参加者の間にチーム・スピリットを吹き込んだ。

サティヤベドゥ村のAPSC代表のゴラジャラトナムは「ダリットに対する暴力行為」の討論をリードした。彼はダリットの学生たちが不可触賤民制に直面した彼の医科大学時代について語った。彼らはホテルでトラブルに直面した。彼らはおたがいに何度も喧嘩をしたがダリットの学生だけが投獄された。多くの場合ダリット指導者は先進カーストの指導者の支配下にあるので、いかなるダリット指導者も彼らを救いに現われることはなかった。

彼は最近ナガラプラム・マンダルのカランジエリ村で起こったひとつの事件を引き合いに出した。あるダリット労働者がいた。彼は彼の上層カーストの所有者と意見を異にしていた。そのためその土地所有者は畑に送電線を植え込んだ。それから彼はそのダリット労働者に、畑に水をやるように頼んだ。いつものようにそのダリットは行って、畑に水をやるようにセットされたポンプの



スイッチを入れた。瞬間、彼は電気ショックを受けて死んだ。

彼は、サティヤベドゥという彼の村で起こったもうひとつの事件を語った。ひとりのダリットが別の上層カーストの男と喧嘩をした。同日、一団の人々がそのダリットの家にやって来て、彼の全財産を破壊した。しかし大衆によっても警察署によっても彼に正義は与えられなかった。

彼はレイプされるダリット女性の数の上昇に懸念を表明した。彼はいかなるカーストもダリットを対等者として受け入れないといった。村落レベルで暴力行為があるのだ。ダリットは土地を持たず、それで彼らの経済的条件はとても貧しいのである。

サティヤベドゥ村の短期大学講師の Mr. ベンカニアは「ダリット間の相異と統一」について話した。

彼は話の中で、ダリットはその間に、マラとマディガ、テルグ・ダリット、タミール・ダリット、クリスチャンとヒन्दゥというように相異があるので発展していきないと指摘した。ダリットはまた上層カーストがダリットと喧嘩をするとき上層カーストを助けるのである。

彼はダリット女性の参加者に、マラとマディガを再統一し、そしてすべての分裂を克服するよう求めた。彼は、我々は他（のダリット）が向上するのを助け、そして彼らからお返しを期待すべきだというアンベドカルの言葉を引用した。よく勉強し、高いポストを得よ。

ニンドラ・マンタルの議員 Mrs. ラジェスワリは、彼女の村でダリットに対して起こった事件に苦悩を表明した。彼女と彼女の夫はダリットの発展のために社会奉仕に関係していた。彼らはダリット間に尊敬を勝ちとった。彼女の夫はサーパンチのために選挙にうって出たが、上層カーストの人々は彼に反対し脅迫した。それから彼らは、選挙を闘うためにある読み書きのできない債務労働者を選び出した。そしてその男、ひとりのダリットは、完全に上層カーストに支配され統治されているサーパンチである。これは、地域における紡績工場、大衆劇場や砂糖工場によって多額の収入があるために生じたものである。

このようなことが、ダリットの政治的に直面している状態である。彼女はみんなが目覚め、社会において大胆に自らを表現すべきであると訴えた。

Mrs. ジャン・デバサーヤムは「女性と家族」というテーマを取り上げた。彼女は家族全体は女性次第であると言った。

我々の社会では女性には二次的なものと考えられている。男は好きだけ多くの女性と結婚し、そして時々女性には非合法的な活動で男を助けさえするのである。彼女は、責任は平等性とは異なると考えた。彼女は、ドリット女性に子供の世話をさぼらないようにアドバイスした。ドリット女性は子供たちを学校へやるようトライせねばならない。教育は発展にとって必要なものである。Mrs. シーバは K. V. B. プラム出身の才知ある人物であるが、彼女はドリット女性の社会経済的、宗教的、政治的状态をテーマに取り上げた。

それから N.Y.S.S. 名誉理事の Mr. プラスナムは、「ドリット女性の諸問題と展望」について演説した。彼は統計的証拠を示した。全人口の五一%が女性、四九%が男性である。女性は男性の一〇倍働く。賃金の比率は一・一〇〇で財産の比率は一・一〇〇である。それは、家族において、社会において、ドリット女性に不公平ではないのか、と彼は尋ねた。彼は言った。男と女は、神が自分の形に等しく創造したものである。しかし男がこの相異を作り出した、と。彼は、宗教にはドリット女性に対するこの不公平に責任のあるものもある、と言った。両親は女の子供を学校へやらない。あるところでは、両親は病院そのもので女の赤ん坊を殺している。女の赤ん坊は街路に、ゴミ箱の中に置き去りにされている。女は男の手の中にある操り人形である。

彼は彼の村で起こったいくつかの事件を語った。ドリットの人々がキリスト教に改宗することを望んだが、上層カーストの人々は彼らが改宗するのを許さなかった。彼らはドリットが彼らの田畑に入ることを禁じた。彼らは飲料水を飲むことを許されなかったし、最後には彼ら上層カーストは教会に放火してそれを破壊した。

彼はもう一つの事件を引用した。彼はピチャトウアで家を購入したが、上層カーストの人々は、彼がドリットであるからとして、彼がその家に入ることを許さなかった。

マドラスのドリット神学の部長である Dr. V. デバサーヤムは「ドリット女性、ドリットの人々に対する暴力行為と、より良き未来を求めるドリット女性のための将来プラン」というテーマで語った。

Dr. V. デバサーヤムは、ケララの「サラディ」という小さな村で起こった事件について参加者に知らせた。ある子供が井戸に落ちその母親は子供の命を救うために助けを求めて大声で叫んだ。誰も子供を救うために現われなかった。とかくするうちに、村人たちがそこに集まった。彼女らはこのことが分からなかったのだが、彼らは彼女らを叱り、ドリットであるという事実によって井戸

水を汚したとして彼女らを非難した。彼らはスリッパで彼女らを鞭打った。

カルナタカ州の「サトゥア」という村で起きたもうひとつの事件。子供のときからずっと「ハヌマン」を崇敬していたダリットの女性がいた。その村にはハヌマンのお寺があった。ある日彼女は夫にお寺にある像が見たいと言った。彼女は結婚以来これ以外に何も夫に頼んだことはなかった。これが彼女の最初の要望だったので、彼はそれを満たしてやりたかった。彼は寺のプジャリーのところへ言つて、妻が寺の中に入つて像を一度見る許しを乞うた。プジャリーたちは怒り狂つた。彼らはスリッパをとつてそれを排泄物のなかに浸し、それを彼の口に押し込んだ。D.V.デバサーヤムは、ダリットの女や男に対する事件はまったく宗教的なものであることを遺憾とした。

ダリットの受難には終わりが無い。それは日々増大している。この国はカーストと経済的基盤に分割されている。ヒンドゥ教の間には二〇〇〇のカーストがあり、ブラーマン、クシャトリア、バイシヤ、シュードラにさらに分割されている。ダリットたちはアウトサイド・カーストと呼ばれている。かれらの間には、マラやマデイガ、ジャデイ人やアデイ人といった区別がある。たった三〇〇〇年前にブラーマンがこの国にやってきて我々を放逐したのだ。我々には手がありそして九〇%のダリットの人々は激しい仕事をしている。先進カーストの人々はその労働の成果を享受しており、それに対してダリットには食物がない。ダリットは家を建てるがしかしその家に住むことは許されない。ダリットは井戸を掘るが井戸の水に触れてはいけないのだ。

D.A.アンベドカルは、先生が彼に室内に居ることを許さなかったので、外から漏れ聞いてサンスクリット語を勉強した、と彼は言った。食堂は食物を出さなかったし、随行員たちは彼が役人であっても彼の書類には触れなかった。しかし、数年後に彼はその教育のゆえにとて高い地位に上つたのである。D.T.デバサーヤムは参加者たちに子供を教育しよう助言した。彼は言った。悲劇はダリットが自分自身の品位を下げてきたことであると。ダリットは他の人と平等だと考えるべきである。ダリットは教育者として生活すべきである。彼は、ティルパシ寺院はダリットが建設したのだと言った。彼は、ダリットは確信を持ち、そしてやりたいすべてを達成することを望むべきだと強調した。彼は最後に、参加者すべてに、ダリットは最初この国を支配したのだからもう一度この国を支配すべきであると訴えた。

## 北京女性会議

上述したこれらのプログラムの外に、DSPはまた、三名の女性が北京での世界女性会議に出席するよう後援した。しかしその内の一名だけが北京に到着した。我々の代表の他に二〇—三〇名の他のグリットの女性が会議に出席したことを記すのは元氣のであることである。グリットの大義はよく代表されたのである。いま依然として見続けるべきことは、どれほど敏感にNGOや仲間の機関が、グリット——何世紀にもわたって声もなく抑圧され支配されてきた人々の叫びに応えるであろうかということである。

また過ぎ去った一年間、きたるべき年月に運動を指導することのできる識見とビジョンを持った若いリーダーたちを見極めるための努力がなされたということが指摘されねばならない。そして、この文脈において、DSPの積極的支持で一九九五年八月一日にデリーでおこなわれる「グリット女性全国フォーラム」は画期的なことなのである。

## DSP青年プログラム…年次報告

一九九五年九月二四日—二八日にニューデリーでおこなわれた全国活動委員会の会合で、DSP青年派は、全国レベルでの二つの「全国青年協議会兼計画プログラム」に加えて、インド各地で一二の青年自覚化兼指導者訓練プログラムを組織しよう、ということが提案された。

## 青年指導者訓練…ピネリ

インドグリット開放大学(DOUI)とグリット連帯プログラム(デリー)は一九九五年一月二七日—三〇日にAPP州グンター県のピネリでグリット青年指導者訓練プログラムを組織した。

プログラムは、CARDS副理事のコーディネーター、Mr.P.アマルナスが、演説者のMr.K.イエスラトナム、Dr.(Mrs.)スワルナ・ラタ・デビおよび他の人達を聴衆に紹介することから始まった。

DSP全体の役員で青年指導者訓練プログラムのDr.(Mrs.)スワルナ・ラタ・デビが会合で演説した。彼女は女性の権利につい

て演説をおこなった。彼女は参加者にダリット連帯プログラムの活動を説明した。彼女は村々で教育を受けた女性が読み書きのできないダリット女性を助けるよう助言し、女性は社会の発展に多くの責任を持っており、それに主要な役割を果たすよう述べた。特にダリット女性はダリット・コミュニティの発展のために教育されるべきである。もし母が教育ある女性であれば、自動的に子供たちは家庭そのもので知識をうけるのである。彼女は女性の権利のための闘いに十分な支持を与えてくれるよう集会に訴えた。夕方参加者は近くの村々を訪ね、多くのダリットに話しかけた。彼らはダリット問題について質問をした。村人たちと参加者たちとの間には、ダリットの諸問題と闘争を描き出すひとつの文化的交換プログラムがあった。

翌日参加者たちは別の村を訪ねた。訪問はあらかじめ知らせることなくおこなわれた。だから参加者は、村人たちがその夜に料理したものを何でも食べる機会をもった。それは大きな経験だった。もし参加者が村人とその訪問を伝えたならば、彼らは特別の食事を準備したであろう。しかし参加者は特別の準備をさけるために彼らに知らせなかったのである。

その翌日の午後、大衆集会がピネリでおこなわれた。グラジャラの代議士、Mr. G. スリニバサラオとグディコングダ(留保地区)の代議士、Mr. G. V. L. M. パラサドが大衆集会で演説した。代議士たちはダリットの間の諸活動に完全な支持を差し伸べることを約束した。

州召集者でダリット・セバ・ダルの Mr. K. イエストラナムはダリットのさまざまな問題について語った。彼はダリットの苦しみと上層カーストによる暴力行為について話した。彼はまた、青年たちにリーダーとなって村で活動するように助言し、村々に青年クラブを開くよう助言した。彼はまたツンドウルやカラマチャドウのダリット大虐殺についての写真や新聞切り抜きを示した。

つぎの二日間、古参のダリット指導者である P. ランジャン・バブと P. バスカラ・ラオが青年たちに演説した。彼らは青年たちにリーダーとなり、人格や自尊心などを維持するように助言した。

CALLS 協会、RDO、RIDE、CAMEL、CAMP、WARD、CARDS などのような多くの組織のボランティアがプログラムに参加した。プログラムは大成功だった。我々は参加者が示した精神によって非常に励まされた。

DOUI の共同召集者の Mr. フランク・P. ビズワナスは参加者に感謝し、青年たちがプログラムに積極的に参加したことにお祝いを述べた。彼はまた DSP 幹事長、Dr. ジェームズ・マッセイ師の幅広い協力と激励に感謝した。

## プログラムのためのサジェスチョン

(1) これらのプログラムは辺境の村々においてもまたおこなわれるべきである。その場合その村々のドリット青年たちは啓発されるであろう。我々はバックワードの人々にプログラムに参加するよう励まさなければならぬ。会合ではもっと多くの歌が歌われるべきである。ドリットは自信を強くもつべきだ。我々はそのやり方で彼らを教育せねばならない。わたしはこれらのプログラムが好きだ。将来このような多くのプログラムをおこなってくれたらよい。

— S・クルパ

(2) ドリットは指導者たちの質を学び習得する。会合の準備に責任を負った M. アマルナスはドリットを励まし、その発展と向上という大義のためにドリットの間で働いてきた。このような型のリーダーが作られるべきだ。

— K・スリヤ・クマール

(3) わが国では多くの人々が食物も着物も家もなしで生きている。彼らについてはどうか？ わたしはこれらのプログラムが彼らを効果的に助けることを希望する。

— K・ロジャニ

(4) もしプログラムが成功することになれば、我々は各村でコーディネーターを任命すべきである。そして我々もまた、コーディネーターの活動を監督するために村々を訪問せねばならない。我々は我々のイニシアティブでプログラムをおこなわねばならない。そのうち我々は彼らをとどこか他の場所につれていってプログラムをおこなわねばならない。

— K・バラプラサード

(5) プログラムはコーディネーターが各村において任命されるときに成功するだろう。我々はコーディネーターたちを励まし、彼らに助言しなければならぬ。同じプログラムが他の村々でもおこなわれるべきである。彼らはドリットとそのプログラムについて知るであろう。我々はすべての村において文化的プログラムをおこなわねばならない。我々はすべての分野において青年たちを訓練しなければならぬ。

— B・オブル

(6) プログラムは他の村々にも広げられるべきである。我々はプログラムをおこなうために政府から財政援助を得なければならぬ。我々は彼らを発展させるために我々自身を発展させるべきである。プログラムで期待されるものはすべてのものによって共有されるべきである。たとえ我々がプログラムをおこなわなかったとしても、我々はプログラムをおこなう人々を助けることができる。年長者は青年層を励ますべきである。ドリットが権力についてきたとき、そのときのみ、プログラムは実りあるものになるで

あろう。

—ソロモン・ラジュ

(7) グリット青年層は、プログラムの効果を発展させるために心を通い合わせ勇気づけられるべきである。我々は青年層を鼓舞するプログラムを導入しなければならぬ。我々は村人たちを指導しなければならぬ。我々は彼らにグリットの権利を知らせねばならぬ。このような多くのプログラムがグリット青年層を励まし啓発するためにおこなわれるべきである。——A・ダナム

(8) すべての自発的な組織は調整をして共に活動すべきである。我々はグリット運動において新しい世代を生み出すように訓練を受けた人々を教育せねばならぬ。我々は文化活動において青年層を訓練しなければならぬ。  
——ダン・ラジ

(9) 我々はプログラムを利用するために各村にコーディネーターを任命しなければならぬ。我々はコーディネーターを獲得し、彼らが規則的にプログラムをおこなっているかどうかをチェックしなければならぬ。われわれすべてが団結してプログラムをおこなうべきである。  
——ダナン

(10) これらのプログラムはずっと多くの村々に導入することによって改善できる。まず第一に我々は村の数を見積もらなければならぬ。我々は村人たちを調査しなければならぬ。自発的組織について知らない村人たちが多くいる。特に農村の女性はそれについて知っていない。  
——K・プラミーラ

#### パラライ村訓練プログラム

青年層のための全般役員、M.T.A. ラメイアは、グリット青年層のための村落レベルの自覚化兼指導者訓練プログラムを開始した。それは村落の大衆にそれが届いたときにDSPが直面するであろう挑戦はどんなものかを理解するためのもの、またこれらの挑戦に直面し対処するのに必要とされる努力はどんなものかを理解するためのものであった。このプログラムは、タミール・ナドゥ州ラマナタプラム県パラマクティ郡のパラライ村で、一九九五年三月二八日—三〇日におこなわれた。これは「パラバイ・ネットワーク」と関係のあるM.T.ロイヤール・L・カンサン、M.T.ムア・ダサンおよび他の人々の助けを得たが、この「ネットワーク」はタミール・ナドゥ州のラマナタプラム県やP.M.T.県において村落レベルで活動しているグリットたちの経営になるNGOの一グループである。

プログラムは二〇歳から三〇歳の年代グループの数名の女性を含んだ約三〇名の若者が出席した。八村落の代表たちであった。プログラムはドリットの起源とアイデンティティ、ドリットのために与えられた憲法上の諸規定、そしてそれらを利用する手段や方法についてだけでなく、また、DSPの使命と未来像のほか、一般的にはドリット・コミュニティの、特殊にはドリット青年たちの直面している諸問題についても、ドリット青年たちに自覚させることを目的としていた。プログラムのための才知ある人たちは、村落や郡レベルで活動しているNGOの職員やMr. A. ラメシアの外に法律専門家たちであった。

この三日間にわたるプログラムは、カースト・ヒन्दゥウが経済的にかあるいは数字的にか支配的であるほどあらゆる村落において、不可触賤民制がおこなわれているという事実を明らかにした。それはまた、その若くエネルギーに満ちた青年たちを含むドリットが、全く恐怖と恥辱のうちに生きているという事実と主張を強めるものであった。警察や他の政府機関は、ドリットが危機に際してそこにアプローチするときにさえも、しばしばカースト・ヒन्दゥウを支持している。

#### 全国青年プログラム計画ワークショップ・ナグプール

将来のプログラムを計画するために、全国レベルの「ドリット青年計画会議」がナグプールで一九九五年五月二日—三日に組織された。このプログラムのための招待状が、一九九四年五月三〇日—六月三日、タミール・ナドゥウ州のイエラギリ・ヒルズでおこなわれたDSP第一回青年協議会に参加したすべての人々を含む五〇名以上の青年たちに送られた。約一五名の青年がプログラムに参加した。

プログラムは、ドリット青年に関係する諸問題についての討論のほかに、「ドリット青年自覚化兼指導者訓練プログラム」を組織する方法と手段を参加者たちに授けるものであった。プログラム全体は、将来青年プログラムが一九九五年—九六年に実行されるようにという計画に向けられた。このプログラムに参加したたいの青年がマハラシュトラ州からだけだという制限を考慮すれば、全国のための計画は不可能であった。その上、一九九四年—一九九五年用に計画されたすべてのプログラムは、一九九五年八月末以前におこなわれるのだが、プログラムを実行する時間はほとんどなかった。

このプログラムは計画どおり一九九五年五月二日に始まった。それは、ナグプールのNCCI（インド教会協議会）総書記アイ



プ・ジョセフ師、Mr. サグカール・ラムテケそしてプログラムの召集者である Dr. K. M. カンブルの祝福を受けた。のちに、D S P 代表 Mr. バクワン・ダス、幹事・理事 Dr. ジェームズ・マッセイ師、そして女性のための全般役員 Dr. (Mrs.) スワルナ・ラタ・デビ——彼らは D S P 一行のヨーロッパ訪問計画に関連してそこに来ているのだが——もまたグループに加わり、他方、青年層のための全般役員 Mr. A. ラメイアがプログラムを紹介した。D S P 代表が D S P の歴史について概要を説明する一方、幹事・理事はインド各地で現在までおこなわれたプログラムの数について話し、そして女性のための全般役員は、ダリット女性の状況と D S P 女性派によって組織されたプログラムを吟味した。その日の残りりと次の日は、提案された青年計画プログラムのために開催地、食物宿泊施設に特に関連して作られるべき諸委員会、討論されるべきトピックを最終決定することに向けられた。

このプログラムでは、一大青年計画プログラムが、インド各地を代表して約六〇名の参加者を招待しナグプールで一九九五年七月二七日—三〇日の三日間組織されるべきことが決定された。この三日間のうち、最初の二日間すなわち七月二七日午後から二九日の午前は、さまざまなトピックに関する議論に向けられ、最終日は地域の召集者および一九九五年—九六年におこなわれるべきプログラムを確認すべきである、とされた。

提案された協議会兼計画プログラムのために最終決定されたトピックは以下の通り。

- (1) ダリット青年連帯における宗教の役割。
- (2) カーストの絶滅・ダリット青年の役割。
- (3) ダリット文化の保存・ダリット青年の役割。
- (4) 新経済政策に照らしてのダリット青年のための教育と雇用。
- (5) 政治的的手段を通じてのダリット青年へのエンパワーメント付与・約束と実行。
- (6) ダリット連帯へのダリット青年（女性）の参加・問題と展望。
- (7) ダリット青年の指導層・問題と戦略。

さまざまな委員会が、前もってまた実際のプログラムで必要な準備をおこなうために設立された。各地域について、新しい青年たちの名が提議されそして彼らの名が D S P 青年派の郵便リストに含められた。Dr. K. M. カンブルは、提案されたプログラムの地

域召集者になること、M.H.ラメイアは全体のコーディネーターになることに同意した。

マンナ・シン・ワラ村セミナー兼村落レベル訓練プログラム

一九九五年五月六日、パンジャブ州フェロゼプール県の辺境村マンナ・シン・ワラ村で一日村落レベルセミナー兼訓練プログラムがおこなわれた。プログラムは、パンジャブ州および北西インドエリアの地域青年プログラム・コーディネーターのM.H.アルビ・パッティが組織した。プログラムは収穫の真最中であるという事実にもかかわらず七五名の人々が出席した。プログラムは、ダリットの状況についての祈りで始まった。平等性と平等な賃金がパンジャブ州の社会・宗教的伝統に照らして討論された。

参加者たちは、ダリット連帯プログラム、その起源と歴史、その目標についての手ほどきを受けた。彼らはまたその優先プログラム事項を知らされた。

トピックの中で討論されたのは「平等」「ダリットの歴史」そして「ダリット女性の特別問題」であった。参加者が強調したのは、彼らが彼らの現在の状況と彼らの個人的かつ集団的生活に対する政府の政策のインパクトを評価するのを可能にしかつ助けるような一連の類似した自覚化プログラムをおこなう必要性であった。

村落レベル自覚化キャンプ・マク

五月七日にパンジャブ州フェロゼプール県マク村で一日自覚化キャンプがおこなわれた。このプログラムはM.H.アルビ・パッティが組織したもので約八〇名が参加した。プログラムはシク教やキリスト教による、M.H.グルデブ・シンやフィリップ・ラケシユの指導する簡潔な祈りで始まった。

参加者はM.H.パッティに指導されて、詳細にダリットの歴史やアーリア人によってダリットに永続的に加えられている暴力行為、特にヒンドゥ聖典によって認められているそれらを討論した。討論は今日でさえも原理主義的ヒンドゥ主義がダリットに作用しているという主張を強化した。

Mrs.シエーラ・パッティは「ダリット女性の特別問題」に関する会議を指導した。彼女は特別のかたちの嫌がらせ、「冗談」の形

態でのカーストやジェンダー関連のことばによる悪口、ダリット女性が特に直面している性的いじめや他のタイプの諸問題を論じた。彼女は参加者にダリット女性を外に出してダリット運動の闘いを組織させるよう厳しく迫った。

また、社会的流動性を高める手段として公的教育を習得する必要性が強調されたが、その流動性は、たとえカーストを基礎にした偏見を克服するのを助けないにしても、少なくともダリットに対するノンダリットの尊敬をもたらずであらう。

参加者たちは将来より多くの訓練プログラムを望むと表明した。

ダリット青年指導者訓練キャンプ・チャンガナチェリー

青年指導者訓練キャンプは、一九九五年七月二五日—二八日ケララ州チャンガナチェリーのCSI(南インド教会)青年センターでおこなわれた。約二十九人のダリット青年男女がキャンプに参加した。キャンプのテーマは「ダリットを完全解放するためのイデオロギー形成への青年層の参加」であった。SEDS副理事のM.F.K.J.ジャコブは、基調演説で、ダリット青年は、ダリット・コミュニティの完全解放のため、ダリット神学を發展させることによって、そのコミュニティを作り上げるのに重要な役割を持っている、と述べた。それゆえ、彼らはダリットの歴史的背景を認識すべきである。なぜなら、彼らの成長のルーツ・歴史を知るもののみが、彼ら自身の發展のためのインスピレーションを得ることができるからである。

開会式後、参加者たちは自己紹介し、ダリット問題に関係した以前の経験を分かち持った。

スリジョン師は「ダリット解放のための神学的展望」について語った。彼はダリットの意味、その聖書的ルーツおよび神学的解釈を説明した。ダリットはこの国の先住民であり、いかなるカースト、サブ・カーストの障壁もなく、一つのコミュニティとして生活していた。しかしアーリア人が移住して以来、彼らがカースト制度を作ったのだ。ダリット・先住民はカースト制度の外にあり、それゆえ彼らは「アウト・カースト」と呼ばれ、ごみあさりや屠殺者などのような賤しい仕事をするよう求められた。こうして彼らは「アンタツチャブル」と呼ばれた。彼らアーリア人はこの区分のために神の名を利用した。彼らは、カースト制度は神の意思によるものであり、それゆえにアウト・カーストや他の低カーストはこの「神の意思」に従わねばならない、さもなければ神に対する罪とならう、と述べた。彼らは低カーストに奴隷制や債務労働さえもまた神の意思だと教えた。彼らは何世紀の間、貧

しい先住民を抑圧するためにこの神学を用いた。低カーストあるいはアンタッチャブルは教育を許されなかった。彼らは「ヴェーダからのスローカ」を聞くことも許されなかったし、寺院に入ることも許されなかった。この残酷さは二〇世紀の初めまで続いた。若干の慣行は今日までいくつかの州・県でおこなわれている。

原理的宗教や神学は上述のように述べており、低カーストの学のあるものもないものも、貧しくなることあるいは貧しさのなかで生活することは神の意思であるという気持のもとにある。これに疑問をもつことは罪なのである。

それゆえ我々は我々人民を解放するための神学を持つべきであり、対抗的神学を見出すべきである。あらゆる種類の悪から我々人民を解放するのは我々の責任である。

彼はUSAにおける黒人による闘争の例を語った。彼らは神学——「黒人神学」と呼ばれる——を創った。彼らは、彼らの状況と生活状態にもとづいて聖書を解釈した。彼らは、神がエジプトにおけるイスラエルの民人の闘争に加わるために降りてきた、ということに聖書の中に見出した。神はモーゼに闘争に加わるよう命じた。モーゼは彼らをエジプトの奴隷から解放するため闘争のリーダーシップをとった。イスラエルの民人は彼と一緒に、神の意思と命令により解放のために闘争した。かくて彼らはエジプトでの奴隷状態から解放された。これはマルチン・ルーサー・キングやジェームズ・コンなどのようなアメリカの黒人指導者たちの使った基本神学であった。彼らはコミュニティを教育し、不公正に対して闘った。——奴隷状態は禁止され、選挙権などのような若干の他の権利は認められた。

それゆえ神学はドリット解放に果たすべき非常に大きな役割を持っているのである。彼は参加者を強くするため、聖書からいくつかの勇気づけることばを用いた。

T.M.イエスタサン教授は「ケララに特に関連するインドのドリットの歴史的背景」というテーマで論じた。

彼は我々先祖の奴隷状態と受難についての実例をいくつか話した。ケララは、地主によって人間が動物のように売られたり買われたりしたインドで唯一の州である。インドの他の州のドリットは債務労働制度を持っていたが、ケララのような奴隷制度ではない。アヤンカリやN・ジョン・ジョセフなどのような地域指導者は奴隷制に対して闘ったパイオニアであった。ケララにおける伝道運動もまた英国の支配者に影響力を及ぼし、奴隷制に反対して活動した。ドリットは一九世紀の終わりに奴隷制から解放され

たけれども、彼らは依然としてその生計のために他人に従属している。彼らは経済的に後進的であり教育などを奪われている。それゆえ、完全な解放の必要性があり、そのため、彼は、発展のために我々自身の人民の間に自覚を作り出す責任を持つように青年たちに厳しく迫ったのであった。討論ののち彼は午後六時三〇分に会議をしめくくった。

グリット活動家でL I C 役員の Mr. サニー・M. カビカドゥは「教育過程を通じての対抗的文化革命の必要性」というのテーマで話した。

Mr. サニーは説明した。我々の持つていた文化は、若い世代の欲求が「サヴァルナ」(上層カースト)文化に従うようになるがゆえに現在消失しつつある。低カーストのたいていの人々は、その生活スタイルや暮らし方がいくらか欠点を持つていて感じており、そのため彼らは上層カーストの階級支配的な文化を採用したがっている。しかし、同時に彼らは上層階級によって受け入れられない。それゆえ我々は、我々のコミュニティを教育しなければならないこの傾向に対抗するために、対抗的文化を持つべきなのである。

グリット活動家で M・C 大学の講師・研究員である Mr. サナル・モハンは「グリット間の失業問題」というテーマをとりあつた。

彼はグリット間の失業の理由を説明した。彼は失業の事実と数字を提示した。グリットの留保割当て分は、いくつかの理由により政府のさまざまな部門で満たされていない。それは資格ある働き手が獲得できないためではなくて、グリットを避けるためである。

彼は二つのことを発表して演説を終えた。(1)我々は留保割当て分において使われるトリックに対して闘わねばならない。そして、(2)我々は資格のある働き手を持たねばならず、そのために若い世代間に集中教育への自覚を作りださねばならない。彼らは近代テクノロジーを利用しなければならぬ。

彼の言ったもう一つの重要な論点は、私的セクターにおける留保割当て分を求める闘いであった。周到で口のかたい諸個人は、雇用機会の利用可能な多くの制度を持つてるのである。我々はまた、銀行からの融資や助成金を利用することによって自己雇用プログラムを開始しなければならない。

インドグリット連盟の活動的メンバーで、司法裁判所のナザールとして働いている Mr. サラバディ・ゴバランは「グリットに対する暴力行為」のテーマで議論を指導した。

彼は支配コミュニティによるグリットへの暴力行為に参加者の注意を促した。彼はグループに、インド憲法には暴力行為に対する法があるが、さまざまな種類の暴力行為が依然として続いていることを想起させた。我々ともに団結しこれらの暴力行為に対抗しなければならぬ。

Mr. D. P. カンジラムはインド憲法とグリット・コミュニティの発展に対する「Dr. B. R. アンベドカルの見解」について語った。彼はイギリスにおける円卓会議とグリットへの共同賠償金についての Dr. アンベドカルの見解について説明した。ガンジーとアンベドカルの間での争い、プーナ協定と留保権についても説明した。彼はグリットの発展とアンベドカルは参加者には新しいものだと述べた。

グループ討論は才知ある人たちの提示したテーマにもとづいておこなわれた。参加者は四グループに別れて午前九時から一一時までテーマを議論した。本会議（一一時—一二時三〇分）でグループ指導者たちはとても役立つ討論の要約を提出した。その後我々はフォローアップ（追跡）プログラムについて協議した。我々は参加者の中から召集者を選んで一九九六年に県レベルで指導者研修プログラムをおこなうことを計画した。我々はまた区やパンチャヤート・レベルで小会合を召集することも計画した。

〔以下次号〕